『零崎問識の人間問答』

裕月照星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
『零崎問識の人間問答』

【Ｎコード】
Ｎ７０６３Ｘ

【作者名】
裕月照星

【あらすじ】
「零崎一賊」
――それは“殺し名”の第三位に列せられる殺人鬼の一賊。
「橙色の暴力」によって一賊が壊滅した四年後。元“死神”の希有な殺人鬼、零崎問識は“とある情報”を求め、請負人を営む戯言遣いの許を訪れる。そしてそれは、京都で繰り広げられる“祭りの再演”を意味していた！

※この小説は西尾維新著「戯言シリーズ」及び「人間」シリーズの二次創作です。
※この小説には両シリーズのネタバレが多量に含まれております。全巻をまだ読み終えていない方、これから読み終える予定の方、ネタバレが嫌な方にはオススメ致しません。
※筆者のブログ記事にて投稿した本作を、少し推敲、加筆したものですので、盗作ではありません。念為。

其の壱

1,

ぼくがまどろみから意識を取り戻したのは、呼び鈴の鳴る音に気付いたからだった。

何だか、昔の夢を見ていた気がする。

四年前、あの鏡の反対側にいたあいつとの、他愛無い会話の記憶。

（今さらな気もするけれど、別に悪い事じゃないか）

しかしそれにしても、あれから、あの別れから、あいつとは全く会っていない。

音信不通である。

ケー番も知らないから連絡の取りようもない。そもそもあいつがケータイなんて持ってるかどうかも疑わしい。

とにかくそんな訳で、会っていない、のだが、

こんな唐突に奴の夢を見てしまうというのは、絆で結ばれているようで気持ち悪くもあり、また、何かの予兆のような気もする。

そんな、寝ぼけた頭で戯言を弄している間に、二度目の呼び鈴が鳴った。

ネームプレートを見直す時間はあったはずだから、確実にぼくの部屋への来客だろう。

となると流石に、これ以上待たせる訳にはいかない。

「……起きます」

ぼくはソファーからもぞもぞと起き上がり、適当に戸に声をかけながら、ふと誰が来たのか考える。

時間は午前十時。
昨晩の調べ物が長引き、就寝が遅くなってしまったのが原因と言えば原因なのだが、結構な寝坊になってしまった。

まぁつまり、この来訪者は別に非常識な時間帯にやって来る類の人ではないという事だ。

こうして呼び鈴を鳴らしている点からもそれは伺える。

しかし、ならアパートの住人かと考えてもその線は薄いと考える。
もしみい子さんとかなら、そもそも呼び鈴を鳴らす前に「おい、いの字」と声をかけてきそうなものだ。

とすると、この来訪者は———

みたいに軽く思考しながら、魚眼レンズを覗く。

扉の前には、全身を紅に染めた人間が立っていた。

「……」

しかし、哀川さんではない。
鍵開けスキルを持つ哀川さんならば呼び鈴なんか鳴らさず、勝手に入り込んでくるだろう。そして寝ていた僕の額に油性マジックで肉と書く程度の事は平気でやるだろう。

そもそも、目の前にいるのは男性である。

中性的な顔立ち、あちこちよじれているセミロングの灰髪、肩を大部分露出させた半袖ワイシャツの着こなし、ダメージの入ったショートパンツにビーチサンダル、背負ったナップザック等等。
色々と個性的なファッションも、全身に滴る赤い液体のインパクトが帳消しにしていた。

そしてレンズ越しからも伝わってくる、彼自身から放たれる、殺気、殺気、殺気。

起きぬけに見るにはあまりに刺激の強い絵面だったために、ぼくは一瞬、言葉を失った。

戯言遣いなのに、言葉を失った。

「……しかし彼が顔見知りである以上、開けない訳にはいかない訳であって」

とりあえず、玄関先にこんな不審人物然とした人物を長時間放置しておいては、アパートの皆にも迷惑だしね。

ぼくは彼を部屋に招き入れるべく、扉を空けた。

途端に強くなる匂いと、殺気。

「やぁ、戯言遣い」

「やぁ、零崎問識くん」

一年ほど前に“依頼人”としてやって来て、以来何度か顔を合わせている殺人鬼。零崎問識。

かつては石凪砥石と名乗り、いつかの崩子ちゃんの両親がらみの一件、闇口家の本拠地である大厄島での一件で、闇口家側に付いていた稀有な死神。

しかしその一件後、彼の持つ膨大な殺気が“零崎”のそれではないのかという意見が出た事で、零崎が島から逃亡する際に同行し、そのまま零崎一賊の一員となった。

そんな彼、零崎問識は、ぼくがいつまで経ってもつっこまない事に痺れを切らしたのか、自分から釈明を始めた。

「あぁ、勘違い死ないでくれよ？　これは返り血という訳ではない。さっきそこで空から落ちてきたペンキを被って死まっただけでね。まぁ、匂いで分かるとは思うが」

「……」

どうでもいいよ、とか言い返そうかと思ったけれど、彼の意外な

鈍くささを思わせる釈明に面喰ってしまった。
抑揚のない、棒読みのような口調だが、そこには茶化すようなニュアンスも感じ取れる。
全く以て、戯言だ。
「まぁ、とりあえず上がるかい？」
「そうさせてもらうさ」
どんな用で来たのかはともかく、まずはシャワーを浴びてもらう事にしよう。
全ては、それからだ。

登場人物紹介

零崎問識　（ぜろざき・といしき）
殺人鬼。

戯言遣い　（ざれごとつかい）
請負人。

零崎人識　（ぜろざき・ひとしき）
殺人鬼。

零崎舞織　（ぜろざき・まいおり）
殺人鬼。

哀川潤　（あいかわ・じゅん）
請負人。

黒四館一　（こくしかん・はじめ）
験求者。

夢浮橋伊刈　（ゆめのうきはし・いかり）
下手人。

夢浮橋時宗　（ゆめのうきはし・ときむね）
下手人。

夢浮橋法師　（ゆめのうきはし・ほうし）　――――――
下手人。

西東天　（さいとう・たかし）　――――――
遊び人。

其の弐

2、

「ふぅ……。悪いね、君のシャツまで借りて死まって」
「構わないよ。一番安いやつだしね」
ぼくとしては、ペンキまみれになった他の服も替えて欲しかったが、そこは問識くんが頑として譲らず、ワイシャツだけ着替える運びとなった。
まぁ、ペンキ臭さは幾分緩和されたから良しとしよう。

零崎問識。
彼はぼくが“請負人”になってから、最も付き合いのある殺人鬼と言っていい。
問識くんと最初に会ったのは一年前。
彼のちょっとした困りごとを解決した事がきっかけで、以降度々ここを訪れるようになった。

「ところで、今日は———いつもの催促かい？」
「まぁ、そんなところだ。近くまで来たついでに、新死い“零崎”の情報が入ってないかと思ってな」

彼の目的は、各地に“生まれているかもしれない零崎”に関する情報だ。

家賊の繋がりを「鬱陶しい」と言う零崎や、楽天家な伊織ちゃん（今は舞織ちゃんだったか）とは違い、問識くんはかなり、“零崎”の復興について真面目に考え、取り組んでいるのだ。

零崎一賊。
殺し名序列の第三位に列せられる殺人鬼の一族。
血ではなく、流血によって繋がる、一賊。

だった。

四年前、西東天による“物語を終わらせる活動”に巻き込まれた零崎一賊は、たった二人を残して全滅してしまった。
零崎人識。
そして、無桐伊織。
しかしその後、問識くんが一賊に加入した事によって、未だにどこかで“零崎”が生まれ続けているという可能性が生じた。
そこで、一賊の一員となり、この説の生き見本となった問識くんは、一刻も早く“零崎”を「殺し名」の勢力として通用する程度にまで人数を増やす事に尽力しているのである。
まぁその件に関してぼくが問識くんに与える事ができた情報は少ないんだけれど、それでも彼は、ぼくに一目置いてくれているのか、時々こうして情報の催促にやってくる。

「うーん、まぁいつも通り、疑わしい人が何人かいる程度なんだけど、いるかい？」
「あぁ、全部もらっていこう」

また、しらみつぶしに調べるつもりなのだろう。
ぼくはいつでも渡せるようにまとめておいたファイルを取り出し、問識くんの方へ渡した。
内容は大部分、ぼくが個人的に調べたものだけど、他の情報元に軽くお伺いを立てて得た情報もある。
まぁほとんどが、表世界の情報である。
そしてそれこそが、問識くんの欲しい情報でもあるようで。

問識くんは普通の世界の情報に疎く、ぼくは暴力の世界の情報に疎い。
だからこうして顔を突き合わせるのも、お互いの情報交換、ギブ&テイクの関係でいようという、一種の取り決めみたいなものだ。
問識くんが資料に一通り目を通し、ナップザックに入れた頃合いを見計らって、ぼくは話しかけた。

「最近調子はどうだい？　零崎とも会ってたりする？」
「……いや、相変わらずだ。なかなか見つからない死、捕まらない」
見つからないのは新しい“零崎”の家賊で、捕まらないのは零崎人識の事である。
他の“零崎”と知り合って以降も、ぼくがあいつの事を零崎と呼んでいるため、問識くんは両方の意味で答えてくれたようだ。
まぁ、ぼくが呼び方を変えればここまでややこしくはならないんだけど、あいつを名前で呼ぶのも違う気がするのだ。
「レンの奴、ここの所めっきり捕捉できなくなって死まっている。マイも焦っているようだったな。まぁどちらに死ても、僕から見れば、二人とも道楽に耽っているように死か見えないけどね」
全くこちらは同胞探死で忙死いというのに、と、ブツブツとつぶやく問識くん。
「……レン？　それは、零崎のことか？」
「ん、あぁ。レンは人識兄のことだが」
「マイは舞織ちゃんだから分かるんだけど、何であいつがレンなん

だ？」

ん？　と、問識くんは小首をかしげていたが、すぐに「あぁ、お前の前でこの呼び名を使ったのは初めてだったか」と納得したようで。

「いつだかの家賊会議で、“零崎”復興の一環として、僕と舞織、そして人識の三人で、新・零崎三天王として君臨しようという話になったんだよ」

「……」

零崎三天王。

前にちらっと聞いた気がする。

そして「もう一人ぐらい頑張れなかったのかよ」と盛大に突っ込んだ気が……。

「それでそれにあたって、かつての三天王、つまりは『自殺志願（マインドレンデル）』の零崎双識、『愚神礼賛（シームレスバイアス）』の零崎軋識、『少女趣味（ボルトキープ）』の零崎曲識の三人を、可能な限りリスペクト死ようという事になった」

「……」

一応、最後まで聞こう。

ツッコミはそれからでもいいだろう。

「さ死あたって、まずはお互いの呼び方を変えようと言う事になった。あの三人はそれぞれ、通り名を文字ってカタカナ二文字の呼称

で互いを呼び合っていたら死い。そうする事で互いの信頼や親死みが増すという事でな」

軋識は、アス。
曲識は、トキ。
そして、双識はレンと呼ばれていたらしい。

「色々と相談死た結果、舞織は双識の大バサミ『自殺志願』を受け継いでいるから、そこから二文字を取って“マイ”に死ようという事になった。女の子ら死いと、本人も気に入っていた。で、問題は僕と人識兄だ」

……聞きながら考えた事だけれど、恐らくこの“相談”、問識くんと舞織ちゃんの二人で行われたものだろう。
仮にあいつがこの議論の場にいたとしても、無視か、ツッコミ役しかしなかっただろう。
そして問識くん、何気に舞織ちゃんと意気投合しているように、思われた。

「呼び名を決めるにしても、僕と人識兄にはまだ通り名が定まってなかったから、そもそもネーミングの材料となるものを持っていなかったんだ」

「……」

「まぁ僕の方はその後、僕専用の武器『刀狩令（ピーストリート）』を手に入れたから、“リト”という名前に決まったんだけどね」

「……うん、覚えてるよ。君が初めてぼくに持ち込んだ案件がそれだったからね」

もしかしてその渾名を決めるためだけに、ぼくにあの依頼を持ちこんだのだろうか？
あんな、あんな依頼を持ちこんだのだろうか？
いやまさかそんな事は決して絶対断じてないだろうけど……。
まさか……ね。

問識くんの話は続く。

「そ死て肝心の人識兄の方だけどね。頑と死て一つの武器を持ってくれなかったんだ。まぁ、プレイヤーと死ては真っ当だけど、そこは零崎三天皇としての様式美が重要だと言う事を、あの男は結局最後まで理解死なかったんだ」

まぁ、あいつはそうだろうな、とぼくも思う。
最初に会った時も、あいつは多種多様、雑多な刃物を持っていたし、後に聞いた話じゃ、その時点で曲弦糸まで会得していたらしいし。
あいつの場合、武器は鋭く切れさえすれば、それで良かったんじゃないかと思う。

「だから結局已む無く、人識兄の通り名は武器の名前ではなく、兄自身の通り名という事に死た」

苦渋の選択だった、と。
問識くんは無表情ながら、拳をぐぐっと震わせて言った。

「それで改めて人識兄自身の通り名と死て、どんな呼び名がふさわ死いかと考えて、マイが提案死たのが――――」

まぁ、察しはついた。
ぼくは舞織ちゃんとも面識があるし、ぼくが“その呼び名”の元ネタという事も知っているようだった。
十中八九、あの四文字だろう。
あいつがぼくを「欠陥製品」と呼んだのに対し、
ぼくはあいつを、こう呼んだ———
「『人間失格(ロストフレンド)』という通り名だ」
「何か変なルビ振ってるっ！！？」
思わず突っ込んでしまった！
いや、これは突っ込むなという方が無理な話だ！
ロストフレンドて！
ロストフレンドてっ！！
「愛称の方も、ロストフレンドの間を取って、レンに決まった」
「いや、そこは言われなくても分かるけど！！」
ひでぇ……
ひどい通り名だ……。
何がひどいって、それがいずれ暴力の世界に流布される事まで見越して、そんな通り名を一方的に決めてしまった問識くんと舞織ちゃんが！
でも、『人間失格』の方はぼくが付けた訳だし、半分はぼくのせ

いかもしれない。
しかし弁解させてもらえるなら、ぼくだってこんなルビが振られるとは思ってなかった訳だから、その辺りは情状酌量の余地はあっていいと思うんだ！

「“変な”とは。戯言遣い、いくら何度か世話になった君とは言え、今のは聞き捨てる訳にはいかない台詞だ」

途端に膨張する問識くんの殺気。
しかも、今はその殺気を拡散させず、集束させて、ぼくのみ目掛けて放射しているようだった。

（気に入ってたんだね……。そうなんだね……）

まぁ、多分これは、
“零崎”の長兄だった双識さんの呼び名と、現在の“零崎”において長兄のポジションにある零崎を、同じ“レン”という呼び名にする事に、何かしらの思い入れがあったのかもしれない。
果たしてそれは、問識くん自身の思い入れか。舞織ちゃんの思い入れか。百万分の一の確率であいつの思い入れかもしれないけれど。

とにかくどうやら、ぼくは地雷を踏んでしまったらしい。
戯言遣いとして、不覚と言わざるを得ない。
今こうして話している相手は“零崎”だ。何度か情報交換をした仲とは言え、そんなものは油断する要素足り得ないはずだった。
……まぁ怒らせた理由が理由だけに、いまいち釈然としない感はあったが。

このどうにも間の抜けた、しかしさりげなく危険度の高い状況が、次の瞬間に一変した。

「おいおいそこの色男。何いーたんに熱烈な視線送っちゃってんだ？」

「！？」
「！！？」

背後から聞こえた勝気な声で、辺りの空気は一瞬で塗り替わった。
赤色に。

ぼくは咄嗟に振り返り、問識くんは殺気をそちらに向け直し、左手をナップザックの中に突っ込んだ。
彼の得物を、すぐ取り出せるように、だろう。

ぼくの、背後。
今の今まで閉まっていたはずの、窓が開いていた。
そして、その上部から蝙蝠のようにぶら下がっている彼女は、全身が赤かった。

さっきまでの問識くんのような、血がしたった様相とはまるで違う。
髪も、スーツも、彼女をコーディネートする全てが全て、燃えるような、赤色。

「このあたしからいーたんを略奪しようってなら、覚悟しろよ、零崎くん？」

人類最強の請負人、哀川潤が、決め顔でそう言った。
逆さまのままで。

其の参

3、

「……お久しぶりです、哀川さん」

「潤だ。あたしを苗字で呼ぶんじゃねぇ。あたしを苗字で呼ぶのは敵だけだ……って、このやり取りも何か懐かしいな」

「ですね」

最近はちゃんと名前で呼んでいたから、こうしてからかうのは久しぶりだった。

「つーか、前に会ってそんな経ってねぇだろ？」

「んー、まぁ、そうかもしれませんね。潤さんにしては、短いスパンでの再会でした」

一応今は、最後にあの展望レストランで会ってから、２ヶ月後くらいという設定だ。

「あれからどうよ？　あの女子高生ちゃんの案件は解決したか？」

「えぇ。まぁ潤さんの予言通り、少し危うい場面もありましたけどね。概ね、落ち着く所に落ち着いて、今はアフターケアをみいこさんにお願いしてるって感じですね」

「ふぅん。みーちゃんも元気そうで何よりだな」

「……いつの間にみいこさんとそんな愛称で呼ぶほど親しくなったんですか哀川さん」

一生に一度はそんな風に呼んでみたいというぼくの願望を軽々とクリアしやがって。

「あん？　別に友達を何て呼ぼうがいいじゃねぇか。つかまた苗字呼びしやがったな？　どんだけみーちゃん好きなんだよお前。玖渚ちんに言いつけてやろー」

「いや、友も普通に知ってますよ……」

今では友もみいこさんに懐いて、むしろぼくと友でみいこさんを奪い合っている状態だった。

と言うか、同棲してるの知ってるだろうに。

「ま、冗談はこんくらいにしてだ……」

と、哀川さんはここでぼくの後ろにいる、問識くんの方へ目をやった。

哀川潤。

人類最強の請負人。

暴力の世界では『赤き制裁』《オーバーキルドレッド》、『死色の真紅』、『砂漠の鷹』《デザートイーグル》等の異名で呼ばれ、全てのプレイヤーから恐れられる、生ける災害みたいな女性である。

それは当然、問識くんにも当てはまる訳で。

いや、零崎一賊にとって、哀川潤はそれ以上に大きな意味を持つ“障害”であるはずで。

「よぉ。こんな所で鉢合わせするとは奇遇だな。零崎、問識くん？」

哀川さんが凄みのある笑顔を見せながら言うと、問識くんから放たれる殺気が、更に密度を増した。

より集束され、より出力を増した殺気が、哀川さんに向けられる。

この部屋が、物々しい緊張感に支配されていく。

人類最強。それはハッタリでもなければ誇張でもない。

その肉体の強度も、有するスキルも、何よりそのメンタルが、厳然たる事実として最強なのである。

だからほとんどのプレイヤーは、彼女と遭遇した時点で、一も二も無く逃げに入る。

勝てないから。

勝てるはずが無いから。

そして暴力の世界で負ける事は、そのまま死を意味する。

なのに、問識くんは、逃げない。

溢れんばかりの殺気を向け、一歩も退こうとしていなかった。

そんな問識くんの様子を見て取ると、哀川さんはクククと不敵に笑った。

「あたしもよぉ、最近は人識君や伊織ちゃんと慣れ合ってきちゃって、特に伊織ちゃんとはたまにテニミュ観に行く仲にまでなっちゃって、零崎ってのに対する嫌悪感とか、偏見みたいなのも大分薄れてきちまってたんだけどよぉ。お前見てるとホント、思い出させてくれるよなぁ」

恐れを知らない、殺人鬼の恐ろしさを。
ホント、いかしてんぜお前。

舌舐めずりをしながらそう言う哀川さん。
正直、もしその笑顔を向けられているのがぼくだったら、一目散に回れ右しているだろう。
逃げ切れないと分かっていても、逃げ出していただろう。

零崎問識。実はぼくは彼の強さがどれ程のものかをあまり分かっていなかったんだけれど。
哀川さんにこんな顔をさせる程の、実力者だったのか。

改めて、さっきの空気が危険だった事を実感した。

「ところで潤さん、いつまでもそこでぶら下がってないで、こっちに入ってきたらどうです？」

そう。彼女は未だ、窓の上から逆さまになった状態なのである。
ロープで吊るされてるんだか壁につま先をめり込ませてるんだか分からないけれど、この状態のまま話し続けるのは絵面的に締まらない。

何より、哀川さんも哀川さんで、ここまで出向いている以上、ぼくに用件があるはずなのだから、とりあえず落ち着いて話を聞ける場を作らなければならない。
一里塚さんではないけれど、ぼくなりの空間製作である。

しかし哀川さんは、少し躊躇するように「あー……」と言いながら頬をポリポリと掻いている。

「どうしました？」

「いや、あたしはここでいいよ」

「何言ってるんですか。せっかく来てもらったのに、そんなぶら下がったままにさせておく訳にはいきませんよ。ちゃんともてなさせて下さい」

「あーまぁ、そうなんだけどさ、ホラ、あたし、踏み込んだ建物は例外なく崩壊するってジンクスあるし」

「……そんな設定まだ残ってたんですね。とにかく入ってくださいよ」

「いやホラ、前の骨董アパートの時もそうじゃん？　この塔アパートまで潰す事になったら、いーたんはともかく玖渚ちんとかみーちゃんとか崩子ちゃんにも悪いし……」

「……と言うより、そのジンクスって、だいぶ穴がありますよね」

四年前の例を挙げるなら、鹿鳴館大学とか、ぼくが月一ペースで通ってた病院とか。

そもそも骨董アパートの時だって、訪れてから崩壊までかなりタイムラグがあるし、直接の原因も哀川さんにはない。

第一、そのジンクスが本当なら、今ごろ京都駅のロイヤルホテルも倒壊していなければならない。

「それにそんな事言ったら、建物なんて時間が経てばいつかは崩壊するんですから、ジンクスなんてあっても無くても同じようなもの

ですよ」

「あっても無くても同じ、ねぇ。親父みてぇな言い方しやがって。まぁ、いーたんがそこまで言うならそう思ってみる事にすっか。あのジンクスは、若気の至りだったっつー事で」

そんな風に一人ごちながら、哀川さんは窓の桟に手をかけて、手を支点にしてぶらさがるように身体を正位置に戻した。

そして足を部屋の方へ入れ、そのまま桟に座るような姿勢を取った。

足をぶらぶらさせている所を見ると、そこを定位置にしたいようだったので、ぼくは何も言わなかった。

大方、ヒールを履いたままだから、土足で部屋に入るのは憚られるし、かと言ってわざわざ脱いで玄関まで置きに行くのも億劫とか、そんな理由だろう。

とりあえずそこまで見たぼくはキッチンからマグカップを三つ取り出し、ペットボトルのお茶を注いだ。

お湯を沸かしていなかったし、哀川さんもそんなに時間がある訳じゃないだろうから、とりあえず速度重視のセレクトだった。

二人にカップを渡して、問識くんに座るよう勧めようかと思ったけれど、やっぱり哀川さんへの警戒が解けないようだったから、無理強いするのは止した。

とりあえずこの場は、早く収めた方が良さそうだ。

「それで潤さん、今日はどんな冒険譚を聞かせてくれるんですか？」

「あぁ。今日はとびきりの冒険を用意してきたぜ、いーたん」

冒険譚ではなく、冒険と、哀川さんは言った。
つまり、ぼくに何かをさせる気なのだろう。
ぼくは手早く、腹をくくる事にした。

それに、と、哀川さんは問識くんの方を見ながら言う。

「想定外のゲストっちゃあゲストだが、これはむしろ幸運だったかもしれねぇな。今回の冒険は、参加人数に上限は無ぇんだ」

ニヤリと笑う哀川さんに対して、無表情ながらより殺意を膨らませて、問識くんは憮然とした口調で返す。

「……どう死て僕がお前に協力死なくてはならない。死色の真紅」

「べつに協力してくれなんて、あたしは一言も言ってねーぜ？　ただ参加してくれるだけでいい」

「……」

「つってもまぁ、いーたんなら、今回のあたしの企画について、察しはついてるかもしれねーけどな」

そんな風に言いながら、哀川さんは話し始めた。
問識くんの意思も聞かずに、勝手に。

「お前ら、今京都で起きてる連続殺人事件については、当然知ってるよな」

「……」
「……」

ぼくも問識くんも何も言わなかったけれど、当然、知っている。
そもそも昨夜ぼくが調べていたのもその事件についてだったし、問識くんも、その件が“零崎”に関係しているのかを確認するために、京都まで足を運んだのだろう。

「今んところ被害者は5人ほど。それぞれ全く接点のない一般人が、短いスパンで殺されている。しかも――――」

「その死体はことごとく、原型を留めないまでに解体されている」

ぼくが引き継ぐと、哀川さんは合いの手の如く、指をパチンと鳴らす。

「あぁその通り。この事件、このまま放置しておけば十中八九、最終的な被害者数は１２人になるだろう」

それより多くも少なくもない、１２人。
その数字には、大きな意味があった。

今起こっている事件は、何から何まで、同じだったのだ。

かつて京都を震撼させた、連続通り魔事件に。

殺人鬼、零崎人識によって、総計１２人の一般人が無差別に殺され、解体（バラ）された事件。
今現在、それと全く同じ殺され方、しかも同じ間隔で、人が次々

に殺されているのである。

犯人は目下、正体不明。

同一犯なのか別人による模倣犯なのか。

全てが不明。そんな、事件。

ぼく自身もそれについて独自に調べてはいるが、今の所、犯人の手掛かりすら掴めていない。

「四年前の悪夢の再来ってことで、沙咲の奴も参っちまっててね。今度は全てが終わる前に解決して欲しいってんで、あたしに話が回ってきた」

ただな、と、哀川さんがぼくを見ながら言う。

「ただ解決すりゃいいんだったらあたしだけでも十分なんだが、今回は人識くんの時と違って、前例がある分、殺しの意味合いが違ってくるんだよな」

殺しの意味合い。

つまり、犯行の動機だ。

前回、つまり四年前の通り魔事件での零崎の動機は、哀川さん曰く「自分探し」だったらしい。

心無き殺人鬼が、人の中にある“心”を探して、色々な人間を解剖していたのだと言う。

……ぼくがその話を哀川さんから聞いた時、色々と思う所もあったのだけれど、「まぁ零崎だし」という事で、割合納得できた。

ただ、今回は、そんな思春期の度を越したセンチメンタルな気まぐれみたいな動機だけでは説明できない、不可解さがある。

「まぁ、あたしもその話聞いてからちょろっと心当たりを調べたんだが、どうやらこの件、ただの狂言じゃなさそうなんだよな」

この人類最強がそう言うからには、確かにそうなのかもしれない。

少なくとも、彼女が身内を巻き込もうと思う程度には、面白い話なのだろう。

哀川さんは、ちらりと問識くんの方を見てから、言った。

今回の冒険の内容を。

「この、零崎人識の模倣犯の確保。お前らにも参加してもらおうと思ってよ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7063x/

『零崎問識の人間問答』

2011年10月27日15時11分発行